

《2007年6月例会報告》

【日 時】2007年6月29日（金）19：00～21：00（その後「ルン」～1：30）

【会 場】筑波大学附属高校3F音楽室＝会議室の右隣

【テーマ】トヨタカップの創設とテレビ中継

【ゲスト】坂田信久（国士舘大学大学院教授／元日本テレビスポーツ局長）

【コーディネーター】牛木素吉郎（ビバ!サッカー研究会）

【参加者（会員）】阿部博一（R&A） 牛木素吉郎（ビバ!サッカー研究会） 木口理恵（朋優学院高等学校） 北原由（都立武蔵野北高校） 三枝敏洋（東京都サッカー協会） 嶋崎雅規（帝京高校） 高田敏志（町田高ヶ阪SC） 中塚義実（筑波大学附属高校） 宮崎雄司（サッカーマニア編集長） 室田真人（中央大学／NPO法人九曜クラブ） 両角晶仁（t o t oプロデューサー）

【参加者（未会員）】★天沼竜一（早稲田大学） 大串哲朗（上智大学） ★木佐貫至（読売新聞） ★坂田信久（国士舘大学大学院教授） 庄司悟（DJ・SPORTS） ★半田一磨（筑波大学大学院） ★堀内晴（慶應義塾大学） ★名取香織（漢陽大学大学院） ★馬淵雄紀（筑波大学大学院） ★石井ごうすけ・★高木信之・★野口こうじ（FCバルセロナ・アジアサポーターズクラブ）

注）★は未会員かつ初回参加のため参加費無料

【ルンからの参加者】安藤裕一 伊藤慧

【報告書作成者】室田真人

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

トヨタカップの始まりとテレビ中継

ゲスト講師：坂田信久 コーディネーター：牛木素吉郎

ゲスト講師

坂田信久氏の略歴 国士舘大学教授、元日本テレビスポーツ局長、プロデューサー、ディレクター、前東京ヴェルディ1969社長

コーディネーター

牛木素吉郎氏の略歴 ビバ!サッカー研究会代表、サッカーライター、前兵庫大学教授、元読売新聞社運動部・米国駐在編集委員

■ トヨタカップのはじまりの裏話（報告者：牛木素吉郎）

今日はトヨタカップの話ということで、トヨタカップよりも長い付き合いの坂田さんに来ていただいております。トヨタカップのはじまりからは、もう30年経っているので、そろそろ時効ではないかということで、これまで名前を出してこなかった人の名前も、できるだけ出してお話をしようと思います。今回の資料は3枚用意しています。

1. トヨタカップとは

トヨタカップについては、みなさんご存じだと思いますので、ごく簡単に紹介をします。現在ヨーロッパ・チャンピオンズ・リーグ、当時はヨーロッパ・チャンピオンズ・カップと呼ばれていた、ヨーロッパの各国リーグのチャンピオンが集まってナンバーワンを決める大会がありました。南米でも、各国リーグのチャンピオンが翌年集まって行う大会がありました。そして、ヨーロッパの優勝チームと南米の優勝チームが対戦する「インターコンチネンタル・カップ」が行われていました。これは、FIFA（国際サッカー連盟）の主催ではなく、地域連盟が関係してやっていたものです。もともとはフランスのスポーツ新聞が企画してはじまったものです。それを日本に持ってきたのがトヨタカップです。どうしてこのトヨタカップがはじまったかが今回の主題です。

日本で25回行われて、現在は「世界クラブ選手権 presented by TOYOTA」となっている行われています。

2. 日本開催のアイデア（牛木の記憶）

なぜ日本でトヨタカップがはじまったかについて、自分のアイデアだったのだということをいう人がいろいろといます。そういう人たちの言い分に反論する気はありません。ただ、ぼく（牛木）の記憶していることを、お話ししておきたいと思います。

当時、ジャパンカップという、各国のチームを日本に招待してやっていた大会がありました。それを、主として日本テレビが中継していました。それが、あまりうまくいっていないと、日本テレビの方では考えていたようです。ぼくはそうは思っていなかったけど、日本テレビの人にとっては満足のいかないということがあったらしいです。そこで、ジャパンカップを良くする方法はないかということで、それを相談する会議というか飲み会があって、それにぼくが呼ばれました。

1) 1979年 築地の小料理屋2階で懇談

その会が、築地の小さな料理屋の2階で行われました。他にも出ていたかもしれませんが、各部署の一人ずつを挙げると、電通から、当時ラジオ・テレビ局で日本テレビを担当している部署の部長の鍋島徳行さんが出ていました。それから日本テレビから、編成をやっていた務台猛さんが来ました。務台さんは現在宮城テレビの社長です。当時は読売新聞運動部にいました牛木が出ています。

もう一人、坂田さんと話をしていたら、首謀者はこの人ではないかという人がいて、それはベースボールマガジン事業社というところの仕事を当時やっていた、その前にサッカーマガジンの編集長だった橋本文夫さんです。

この人は今、アンサーという会社の社長をしています。この人は25回のトヨタカップのプログラムすべてを、自分の会社で作りました。非常に良心的に取材して大会プログラムを作っていました。ぼくは今のプログラムを非常に嘆かわしく思っています。それはほとんど取材されずに作られ、内容が非常に薄っぺらいからです。橋本さんは、取材のために人を南米にもヨーロッパにも出し、カメラマンも出し、プログラムを作っていました。だから儲からないんですけど、でも良心的なものを作ろうという意気込みがあって非常に良かったんですね。

話は少し横に逸れましたが、その橋本さんを入れて飲み会をやりました。そのときに務台さんが言ったと思うんですけど、ジャパンカップをやっているけど、良いチームが来ない、鍋島さんも、画面を見ていても、ヨーロッパサッカーの映像と比べて迫力がないと言っていました。ジャパンカップはタイトルマッチではないので、ワールドカップなどに比べて迫力の点で劣るのはやむを得ない。だけど、エキシビションはエキシビションの良さがある。良い選手が来ていて、有名なチームが来ているじゃないかと、ぼくは言ったんですけど、テレビ側、電通側にとってみれば十分満足できるものではなかったようですね。

それで、そのときにぼくがインターコンチネンタル・カップ、南米とヨーロッパのチャンピオン同

士の戦いがうまくいかなくなってきた、それを日本でやるのはどうかと提案しました。ただ、そのときはその話をしただけで飲み会は終わってしまいました。ですから、ぼくは、この提案はこれで終わったように思っていました。実は、日本テレビで動いていて、あるいは電通の方で動いていたわけですが、ぼくのところには伝わってきませんでした。

2) 1980年4月 トヨタがスポーツイベントの企画を広告会社に公募

それから翌年、電通ではない別の広告会社の知人が、ぼくのところに訪ねてきました。トヨタが会社の行事の記念事業としてスポーツイベントの企画を広告会社に公募していると言うのです。それで、プレゼンテーションをしなければならぬので、何かアイデアはないかと相談にきたんです。そこでぼくは、電通がやらないんだったら話してもいいんじゃないかと思って、ヨーロッパのチャンピオンと南米のチャンピオンの試合を日本でやるのはどうかって話をしました。そのときにこの企画の狙いを念を押して伝えました。つまり、ヨーロッパの一番強いチームと南米の一番強いチームが1試合だけやる。1試合だけやるからお金も掛からない、日数も掛からない、だから日本でやる価値があるという話をしました。

だけど、後から聞くと、その知人はプレゼンテーションをするときに話を大きく膨らませて、今の世界クラブ選手権と同じアイデア、地域の代表を集めてクラブのワールドカップをやると言ってトヨタに提案をしたらしいのです。トヨタの方ではおもしろいと言っていたそうです。ちなみに、電通が持っていたのはテニスのイベントだったそうです。テニスだとありきたりでおもしろくないと、サッカーのイベントを進めることになり、その時点では、電通でない広告社が勝利したわけです。それで彼らは実現のために動き出し、交渉をはじめました。南米との交渉のために、当時古河電工所属でブラジルにいた人を使っていたということでした。しかし、うまくいかなかったのですね。

3) トヨタが電通に協力するように指示。電通・日本テレビがウエストナリー社を通じて欧州と南米に交渉

もたもたしているうちに、トヨタがこのイベントは電通に協力してもらうように指示をしたとのこと。その広告社の手には余るから、電通と組むことになったと当時は理解したのですが、後に専門家の人に聞きますと、当時トヨタの広告予算は年間300億円くらいあって、そのうち250億円くらいは電通がまるごと預かっていたそうです。だから新たな予算はトヨタから直接は出せない、つまり電通の250億円の中からやれということで組むことになったようです。

トヨタカップの行われる前年の1980年の10月ころです。後樂園球場の関係者用の食堂で、日本テレビの後藤達彦さんという有名なプロデューサーに会いました。後藤さんが、ぼくに「このイベントをやるのにエージェントが100万ドルと言ってきたが、その値段は妥当かどうか」と尋ねました。そのようなことをきかれたってぼくには分かりません。だけど、当時、読売日本東京マラソンというのを東京で行っていたのですが、それが2億円だったということでしたから、サッカーの試合ではそのくらい掛かるんじゃないかと。人数も多いし、視聴率も高いわけですからと答えました。分かった、と言って後藤さんは帰られました。

それから1~2ヶ月して、電通のスポーツ担当で、現在常務をやられておりますが、高橋治之さんが読売新聞社の僕のところを訪ねてきて、明日、インターコンチネンタル・カップについてホテルに集めて発表すると言ってきました。もうすでに発表するという案内は回ってきていたのですが、「牛木さんにはお世話になっていたので、予めお知らせします」というようなことでした。そこで、ぼくは高橋さんに、「それはだめだよ。そこで発表しても、新聞に載らないことはないけど、小さい記事しか載らない。これは普通の大会とは違って、本当に価値のあるものなんだ。タイトルマッチではないけれど、世界一を争う大会で、選手権に匹敵するものだというを理解してもらわなければならない。集まった記者たちにただ発表しても理解してはもらえない。だから、あらかじめ各社を回って、

サッカー担当でサッカーに詳しい担当記者にインターコンチネンタル・カップの意義を説明して、明日の発表に来てくれるように頼みにいくべきだ」と言いました。「ただし、先に書かれちゃ困るから、書くのは発表後にしてくださいと頼むのも忘れないように」と伝えました。

このように言ったら、高橋さんはすぐその場で手配して、いろいろな人に手分けして、各社をまわりました。例えばアンサーの橋本さんも朝日新聞に行かされたそうです。朝日新聞だったら中条一雄さんのところに、共同通信だったら鈴木武士さんのところに訪ねていきました。特に海外のサッカー事情に詳しい人に説明をして理解していただいたので、割と大きな記事として載りました。いろいろなスポーツイベントができあがったところで、発表はしょっちゅうあったのですが、他のものに比べても大きく載って良かったと思います。

これがぼくの知っているトヨタカップ誕生の経緯です。

南米とヨーロッパのサッカー界やチームとの交渉は、ウエストナリーという会社がやりました。ウエストナリー社は、英国人のラグビー記者のピーター・ウエストと当時まだ若かったパトリック・ナリーの広告屋が作った会社です。いろいろなことをやったのですが、非常に画期的だったのは、アマチュア・スポーツに広告スポンサーを付けさせたことです。このウエストナリーの日本での代理人を務めたのが、ジャック坂崎という人です。彼はパトリック・ナリーと組んで、ウエストナリー・ジャパンという会社を作っており、主として日本でスポンサーを付ける仕事をしていました。そこで、ジャック坂崎は電通の命を受けてヨーロッパに行き、FIFA と密接に仕事をしていたパトリック・ナリーに話して交渉をして、割とスムーズに実現しました。

このあたりのことは、これまであまり詳しく話したことはありません。これは、電通に企画を取られた広告社の人への配慮もあったり、日本サッカー協会への配慮もあったからです。当時の日本スポーツ界には、厳しいアマチュア規則があって、日本サッカー協会はその規則を守らなければならない立場でしたから、こういう企画に表沙汰で動けない。それで、日本テレビと電通で勝手に動いているという印象を与えてはいけません。そういういろいろ複雑な背景がありますから、あんまり表には出せないというのがありました。いまはもうそろそろ時効ではないかということで、関係者の名前も挙げてお話ししたわけです。

3. 日本開催が実現した理由

なぜ、この大会を日本に持つてくることに成功したかについて、少し説明しておきます。

直接的な原因はインターコンチネンタル・カップが行き詰まっていたということです。その理由は3点あります。

1) インターコンチネンタル・カップが開催困難となった理由

一つは、ヨーロッパと南米の経済格差のために、経済的にうまくいかなかった。二つ目は、ホーム・アンド・アウェーの2試合やっていますから、どうしても日程がかかる。特にヨーロッパ側は日程調整が困難でした。シーズン中だとリーグの試合にひっかかってくることもあり、オフシーズンだと選手が嫌がるということがあります。そのため、2試合制でやるのは非常に困難になっていました。三つ目は、その前にイングランドのチームが南米に行ったときに、南米のサポーターが騒いで危なかった。それで危険でできないということです。イングランドの記者たちが、南米の治安の悪さ、サポーターの乱暴さを、でたらめで飲んだくれのイングランドサポーターのことを棚に上げて、悪口を書いていた。

この三番目の話を、ぼくたちは、ことさらに日本に紹介していました。今の人たちからみると奇妙な話なんです。外国ではサッカーはこんなに大衆が騒ぐほど盛んなスポーツだということを、日本のみんなに知らせたいと思ったからです。当時、日本ではみんな知らないんですよ、世界中でサッカーをやっているのに騒いでいるなんて。そういう話を新聞にちょっとでも載せると、サッカーとい

うのは世界的なスポーツで、非常に人気のあるスポーツだということが分かるだろうから、わざと、お客さんの騒ぎの方を大きく書きました。

でも本当のことを言うと、経済的な事情が一番大きかったと思います。というのは、当時はドルが非常に強いわけですね。例えばドルに対して、ポンドはどんどん下がりました。そして南米の方は、クルゼイロとかペソなどの南米の通貨はどんどんではなく、どすんどすと下がっていきました。そのためにイングランドのチームは、ブラジルに行って試合をして、あるいはアルゼンチンに行って試合をして、現地の通貨でお金をもらっても、ドルに直すと非常に安くなってしまいます。

当時、南米の国では為替レートが3通り、4通りもありました。政府の決めた公定レートがあるが、非常に低い。それでは貿易が成り立たないから、貿易レートというのがある。それから観光客用の観光レートというのがある。さらに闇レートがある。ぼくらが南米に行ってお金を交換するときは、みんな闇で交換しました。そうでないと、えらく損をしてしまいます。名目的に少しだけ公定レートで換えて、あとはみんな闇で換えるということをしていました。だけど、有名なサッカーチームが行って、闇レートでお金をもらってくることはできませんから、非常に安い貿易レートでお金をもらってくるわけです。損をしますね。イングランドのチームにとっては、南米で試合をするのは非常に損ですから行きたくない。そういう経済的な事情が、インターコンチネンタル・カップが行き詰まった本当のところだっただろうと思います。

2) 日本開催の利点

この行き詰まっているインターコンチネンタル・カップを日本でやればどうか。これが、トヨタカップのアイデアです。

一つは経済力の点で、日本で開催する利点は大きい。ポンドはどんどん下がっている。しかし円は強いんですよ。南米のチームが日本で試合をして、米ドルでギャラを貰って帰ると、非常に有利ですね。ヨーロッパのチームも南米で貰うより日本で貰った方がずっといい。円は強くなっていましたから、日本にとっても、ドルでギャラを払うのは悪くはない。日本にとってもヨーロッパにとっても南米にとっても、日本開催は非常にいいアイデアだったわけです。

それから、日本は中立国ですからホーム・アンド・アウェーでやる必要がない。1試合だけやればいい。ぱっとやればぱっと帰ることができる。南米のチームはぱっと帰ることはなかなかしなかったんですけれど、イギリスのチームなんかは、ぱっと来てぱっと帰るわけですね。

お客さんに関して、日本人のお客さんがほとんどですから、騒ぎの起きる心配は、ほとんどありません。

4. 日本開催の3つの意義（第1回プログラムの巻頭の文から）：上記のまとめ

- 1) ホーム・アンド・アウェーの困難を解消
- 2) 日本のサッカー発展への強い刺激になる
- 3) 日本の民放テレビの映像を世界へ送り出す

三つの難点が、三つの利点になるわけですから、非常に良いアイデアだったというふうに思っています。これは、日本テレビの人から聞いたことですが、日本テレビは、日本で制作した映像を世界に送ることができる、日本から発信できるということに、非常に意義を感じていたということです。

5. 現在の世界クラブ選手権に思うこと

ぼくがトヨタカップについて、きょうお話ししようと思ったことは以上です。

いま、トヨタカップに代わって行われている「世界クラブ選手権」では、このトヨタカップのアイデアのいいところは、みんななくなってしまったわけです。

世界各地のクラブの代表を集めてやる。そうすると強いところと弱いところが来て、テレビとし

ては非常にやりにくい、アンバランスなカードが出てきてしまいます。

それと、FIFAの公式戦、タイトルマッチとしてやるわけですから、放映権も主催権もみんなFIFAが取ってしまって、地元が一生懸命やる価値がなくなってしまったわけです。試合数が多くなっているのに、日本は経費ばかり、かかります。

川淵さんはずっと日本でやりたいと言っているようですが、何をバカなことを言っているんだ、と思います。日本で3回やりましたから、あとはほかの国でやってくださいと言って、FIFA会長のブラッターに、「どこも引き受けてくれるところがないから、川淵さん、引き受けてくださいよ」と頭を下げさせなければいけない。それで、じゃあ幾ら出すって交渉するのが本当の商売ではないかと思うんですけど、そうはいかないんですかね。

下記に、当時のインターコンチネンタル・カップとジャパンカップのカードについて書いてあります。これを見ると、ジャパンカップの困難な理由も分かるし、インターコンチネンタル・カップが行き詰まっていたようすもわかります。イングランドのリバプールとかノッティンガムが優勝したのに、辞退して2位のチームが来ていたわけですね。ドイツのボルシアMGやスウェーデンのマルメが出ています。

☆1970年代後半のインターコンチネンタル・カップ

年度	欧州チャンピオン	南米チャンピオン	インターコンチネンタル・カップ
1975	バイエルン	インディペンディエンテ	(中止)
1976	バイエルン	クルゼイロ	バイエルン 対 クルゼイロ
1977	リバプール	ボカ・ジュニアーズ	ボカ 対 *ボルシアMG
1978	リバプール	ボカ・ジュニアーズ	(中止)
1979	ノッティンガム	オリンピア	オリンピア 対 *マルメ

トヨタカップ

*は欧州2位

1980	ノッティンガム	ナシオナル	ナシオナル 対 ノッティンガム
------	---------	-------	-----------------

☆当時のジャパンカップ (1981年からキリンカップに)

1978	日本代表 日本選抜	タイ代表、韓国代表 コペンストリー・シティ (イングランド)、1FCケルン (西ドイツ) ボルシア。メイヘングラッドバッハ (西ドイツ) パルメイラス
		決勝 ボルシアMG 1-1 (延長) パルメイラス
1979	日本代表 日本選抜	インドネシア代表、ビルマ (ミャンマー) 代表 トットナム・ホットスパ (イングランド)、ダンディー・ユナイテッド (スコットランド)、フィオレンティーナ (イタリア) サンロレンソ (アルゼンチン)
		決勝 トットナム 2-0 ダンディー・ユナイテッド
1980	日本代表 フジタ工業	中国代表、 ミドルズブラ (イングランド)、エスパニョール (スペイン) アルヘンティノス・ジュニアーズ (アルゼンチン)
		決勝 ミドルズブラ 1-1 (PK) エスパニョール

6. このセクションに関する質疑応答

中塚：ジャパンカップの話ですけど、私自身これがはじまって非常に嬉しかったのを覚えています。どこが主催していたのですか。

牛木：日本サッカー協会です。

中塚：これだけのチームを呼ぶには相当お金がかかりますよね。その辺りの話をしていただけませんか。

牛木：坂田さん、それはどうですか。

坂田：それについては、僕のところで入れますので、あとで話します。

牛木：見たらわかるように、アジアのチームとヨーロッパのチームを呼んで、それも日本と割と関係のあるところが呼ばれているわけです。当時は放映権料はそれほど高くはないし、入場料収入も今ほど高く上げられる時代ではありませんので、日本サッカー協会独自でやるのは、経済的には困難だったと思います。

木佐貫：ひょっとしたらこれも坂田さんかも知れませんが、開催経費を100万ドルで相談されたとおっしゃっていましたが、実際第1回はどのくらいかかったのでしょうか。それと、優勝賞金は幾らだったのでしょうか。

牛木：優勝賞金については知りません。当時そういったことは発表されていません。100万ドルというのは、後藤さんがぼくに言った金額であって、実際に幾らだったかということは分かりません。翌年の2月に試合が行われたんですけど、ノッティンガムのスケジュールの都合で2月になったんです。年度末だし、新たにトヨタがお金を出すことはできなかった。電通の方から聞いた話で、事実かどうか分からないんですけど、トヨタの予算を握っている部があり、とりあえず、電通内でそこから借りて第1回を開催したということでした。開発局の中にあるスポーツ担当部署の西郷さんという方が6000万円借りて、多少のスポンサーを付けてやったということです。その次の大会から、2億か3億になっていたと思います。では、ここで、いったん打ち切って、坂田さんの話に入りたいと思います。

■ トヨタカップのテレビ中継（報告者：坂田信久）

0. 牛木氏から坂田氏の紹介

坂田さんとは非常に古い友だちで、1974年の西ドイツ・ワールドカップの時に一緒に行きました。2人とも自分のお金で行ったんですけど、彼は南回りのパン・アメリカン航空の世界一周便で行って、ぼくはモスクワ経由のアエロ・フロートで行きました。坂田さんが1日早く日本を出ましたが、南周りは時間がかかるので、フランクフルトに着いたのは坂田さんの方がちょっとはやいだけでした。

ぼくがフランクフルトのホテルに着いたら、坂田さんはベッドに倒れこんで寝ていました。その後、仕事でも、個人的にも、いろいろなことをいっしょにして、今日に至っているわけです。

みなさんご存じのように、ヴェルディの社長もしました。そして現在は国士舘大学で教授をやられておられて、今日は最終時間のゼミを学生に任せてきたという話です。

1. ジャパンカップの誕生秘話

ずっとテレビ関係の仕事をしてきたものですから、最初に雰囲気作りでビデオを見たいと思います。

〔流している映像〕

- ・1974年、帝京高校サッカー部の初優勝のビデオ
- ・第2回トヨタカップ、リバプール対フラメンゴのビデオ

トヨタカップの雰囲気を出したところでもよろしくお願いします。

これまでは、どうしてトヨタカップが日本で開催されるようになったかという牛木さんの話でしたが、僕は日本テレビの方からの流れをお話したいと思います。東京ヴェルディ 1969 の「1969」というのは、ヴェルディの前身の読売サッカークラブができた年のことです。1968年メキシコオリンピックの銅メダルを受けて、日本サッカー協会は、次はワールドカップを狙うと。それで、早くプロをスタートさせたいということで、当時の日本サッカー協会の依頼を受けて、読売グループで読売サッカークラブを立ち上げました。その時の話では、4〜5年経つと、当時の日本サッカーリーグの幾つかのクラブはプロ化して、プロリーグがスタートするはずだったんです。実際には、1993年までありませんでした。

そういう中で私たち日本テレビは、プロのサッカーチームに選手を供給するところを強くしないと。ただプロのクラブを作っても盛んにならないだろうということで、大学サッカー、高校サッカー、中学サッカーのどこをまず強くしなければならぬかと考えました。そして、高校サッカーを強くすることを選び、高校サッカーを強くすることをテレビで協力しようということではじまったのが「全国高校サッカー選手権大会」のテレビ事業です。

読売クラブができ、全国高校サッカーのテレビ事業がはじまりましたけど、なかなかプロになりませんでした。そういう中で早くプロ化できるような環境を作りたいということで、全国高校サッカーの営業を引き受けてくれた電通と話をし、ジャパンカップをスタートしました。ジャパンカップはすべて電通がお金を整えました。テレビで放送したのは、日本テレビとテレビ東京だけです。他のところは、そんなのを放送しても視聴率は取れないということで断られたのが実状です。日本テレビとテレビ東京の放送は、電通の買い切りです。日本テレビのその時間のスポンサー料金を全部まかってくれました。

ジャパンカップをはじめた理由は、本物のサッカーを日本のサッカーファンの方に見てもらおう、本物のサッカーはこんなにおもしろいんだということを感じてもらおうとありました。日本サッカー協会もお金の心配がないものですから、やりましょうということになりました。

ところが当時、日本のサッカー界には外国と交渉する能力がほとんどありませんでした。電通にもありませんし、日本サッカー協会に至ってはほとんどないんですよ。

ちょっと話はそれますが、クラマーさんが1960年に日本に来たとき、日本サッカー協会に、ドイツで生まれたアディダスを紹介しています。以後、日本サッカー協会はずっと続けてアディダスと契約を結んでいて、ついこの間も、6年間の契約を更新しました。今回はアディダスよりもはるかにすごい金額を提示するメーカーがあったけれど、アディダスに日本のサッカーがずっとお世話になってきたから、そこは断りました。お世話になっているというのは、交渉能力のない頃に、アディダスの力でいろいろなチームを呼ぶことを行ってきました。そういった恩を、簡単に、他のメーカーがお金がいいからといって切ることができないということを聞いています。

ジャパンカップができたときにも、来日したチームをみていただけるとわかると思うのですが、一つ二つはアディダスのおかげでいいチームが来ました。しかし他のチームをみたとき、日本が遠征に行ったときにお世話になって、そのときの恩返しのような感じで日本サッカー協会が決めてくるものですから、なかなかジャパンカップの価値が上がりませんでした。本当のサッカーのおもしろさを見せてくれるのかというと、甚だ疑問でした。

正直言うとトヨタカップの最初のうちも、本当のチャンピオンシップの戦い方ではなかったということが、みなさんもおわかりになると思います。トヨタカップでもそういう状況でしたので、ジャパンカップに至っては、ワールドカップでの戦いのようなものは見ることはできませんでした。

2. 衛星放送の歴史

ところで衛星放送はいつ頃から始まったのかご存じですか？

スポーツの大きなイベントでいうと東京オリンピックが最初です。東京オリンピックは、通信衛星を使って初めて衛星で放送されたんです。放送衛星ではなくて、通信衛星を使いました。ご存じだと思いますのですが、1963年にアメリカと日本との間で、通信衛星を使ったテレビの放送のテストがありました。テストでは本来、アメリカでケネディ大統領が日本向けにスピーチをするはずだったのが、ケネディ大統領暗殺の映像が飛び込んできてみんなビックリしました。

そのテストを何でやったかという、64年の東京オリンピックを何とか衛星を使って海外に中継したいと考えていたからです。というのも、ヨーロッパとアメリカとの間で、1962年にテストを行って成功し、63年には何回か衛星を使った放送をやっていました。それで、日本の郵政省、NHKがアメリカにお願いに行き、63年にテストとなり、64年の東京オリンピックがスポーツイベントとしてはじめて衛星で海外に放送されました。先ずアメリカに届き、アメリカからヨーロッパに向けて放送されるという形でした。

放送衛星が打ち上げられたのは1968年です。これはメキシコオリンピックの年です。放送衛星を使ったものは「衛星中継」といわれ、通信衛星を使った東京オリンピックは「宇宙中継」と言われています。1968年に放送衛星が打ち上げられてから、テレビの衛星放送がしばしば行われるようになり、1970年代に入ると、外国のスポーツのビックイベントが年に何度か日本で見られるようになってきました。

3. 日本テレビの側から見るトヨタカップ

そういう中で、日本テレビは、いつも外国からもらっているけど日本から発信できるものはないのか、という話を内部でしていました。ちょうどその頃、牛木さんがお話しされたような広がりがありました。インターコンチネンタル・カップというイベントが止まっている。日本から発信するには、これは最適ではないかと話になりました。日本テレビから、先ほど出ましたウエストナリーのジャック坂崎氏に、まずできるかどうかを調査するように発注しました。ウエストナリーは当時 FIFA、UEFA、CONMEBOL とマーケティング契約をしている代理店です。その後 ISL にすべて取って代わるんですけど、その当時はウエストナリーがやっていました。

僕が聞いたインターコンチネンタル・カップというのは、もともとはヨーロッパのチャンピオンと南米のチャンピオンが、それぞれのクラブのお金儲けのためにやっていたものです。クラブ同士の約束事で、ヨーロッパでは南米のチームを招き、南米ではヨーロッパのチームを招いてそれぞれクラブが主催してお金を稼いでいたのです。そのうち UEFA と CONMEBOL がお墨付きを付けて、イベントがだんだん公式化してきたと聞いています。ウエストナリーに聞いてもらったときには、UEFA と CONMEBOL はもちろん同意してくれましたけど、FIFA の同意がないとできないということで、日本で行われた大会から FIFA、UEFA、CONMEBOL が名前を連ねてやるようになりました。

話が横に逸れますが、1980年前後、例えばサッカーでいうとブラジルのアベランジェという人が会長になっています。IOC（国際オリンピック委員会）ではサマランチが会長になっています。それから国際陸上競技連盟ではネビオロという人が会長になっています。今よく言われているのですが、スポーツの商業主義を促進したのはこの3人で、3悪人のように言われています。ご存じのように1984年のロサンゼルスオリンピックでピーター・ユベロスがすばらしいマーケティング力を発揮しました。モントリオールオリンピックはすごい赤字で、結局1998年までモントリオール市民は赤字の補填のために税金を払い続けたと言われていたのですが、ロス五輪は、スポーツのイベントはお金が儲かることを示しました。それを見ていた3つの大きな団体の3名が、ロス五輪のように、もっと儲けることができるのではないかと考えました。この人たちの言い分は、お金を儲けることによって、競技をやっているアスリートがもっとそのスポーツに専念でき、また高い競技力を付けさせてあげることができる、ということでした。

マーケティングをうまくするためには、テレビ放送の質を高めることが大切だと考えました。1986

年に国際陸上競技連盟が、3つの団体では初めてテレビガイドラインというものを作りました。テレビガイドラインとはつまり、放送の質を高めるために、カメラの位置をどのように置いたらいいのかとか、画面の作り方の基準を示すものですが、この後FIFAも作りまししIOCも作りまし。世界で最も早く作ったのは国際バレーボール連盟で、1970年代の終わり頃に作りまししたが、極めて簡単もので、現在バレーボールの大きな大会での参考にされているものではありません。3つの団体の作ったガイドラインは、少しずつ進化はしていますが、大筋今でも維持されています。

視聴者には、スポーツの商業主義というのは、実はテレビの画面の質が非常に向上したのを見られるようになってきているということを知ってほしいと思います。テレビの側から言うと、質の高いものを作って出さなければならなくなったのです。

4. トヨタカップの創世記と放送技術

第1回大会は、イングランドのノッティンガム・フォレストとウルグアイのナショナル・モンテビデオの対戦でした。日本テレビとしてはイベントを成立させるのに精一杯で、中継制作の準備が整いませんでした。そんなに恥ずかしい映像は作っていないのですが、そのときは42カ国に放送されています。これは生中継もありますし、録画中継もありますし、ハイライト放送も含めてです。現在は100ヶ国以上になっているそうです。そのときの映像に関しては、何のリアクションもありませんでした。

第2回のリバプールとフラメンゴの試合は57カ国に放送されました。ぼくがディレクター・プロデューサーをした大会なのですが、嬉しかったのは、FIFAの技術委員会から「素晴らしい映像だ」と誉められたことです。ワールドカップに匹敵すると書いてありました。このときは、幾つかの試みをしております。ヘリコプターにカメラを乗せ、それをリモコンで操作できるようにしました。防震カメラが開発されて乗った中継がこれです。おそらく世界でヘリコプターにカメラを乗けて放送を行ったのは最初ではないかとぼくは思っているのですが、そういった意味で、ぼくにとって第2回のトヨタカップは、われわれの制作能力を示すことができた、それはつまり日本から発信したイベントということもあるけれども、テレビのいい映像を世界中に発信したいという、ぼくらの願いを叶えてくれた大会でもありました。

今から別のビデオを見ていただきますが、ヘリコプターで結構長い間撮ったところを抜いてきました。これは国際映像です。それをちょっと見ていただきたいと思います。

〔流している映像〕

・第2回のトヨタカップのヘリコプターからの映像

〔映像が流れているときのコメント〕

操作自体が難しかったのですが、パスワードがうまく表現できていたかと思っていたところ、評価していただいて大変嬉しかったです

このときは、カメラを9台使っています。

サッカー中継って、単に映像を映しているように思われるかも知れませんが、結構約束事があるんです。これからの話はトヨタカップに限った話ではないのですが、例えばタッチラインがあります。普通のスポーツの中継は、ボールは真ん中で映りますから、タッチライン沿いでボールが動いているときは、スタンドがかなり入った画になってしまいます。サッカーの場合は上のスペースは必要ないから、できるだけ下げてぎりぎりのところで手前のフィールドスペースを入れた方がいいのです。また、例えばシュートをします。ボールが何処に飛んでいったのかではなくて、ボールがゴールに入ったか入っていないかさえわかればいいんですよ。そうすると、ゴールできちんと止めなければならないということがあります。それから、サッカーはアウト・オブ・プレーの時間が短いです。そうい

った意味では、選手のクローズアップを撮る時間が少ないんです。そうすると、アウト・オブ・プレーになったときに、割とこまめに選手のクローズアップを撮っておかないと、選手の顔がなかなか撮れないんですね。最近はみんな本当にうまくりましたが、このころは不十分でした。

つまり、サッカーの試合をただ安全にスーと撮っているだけでは、おもしろみのないものになってしまいますが、徐々にそのへんが撮れるようになってきていて、僕は 2006 年のワールドカップのときの映像を見ると、日本のテレビ局の制作能力というのは決して劣ってはいないと思います。

それでも 2002 年の時は、日本のテレビ局が作った映像ではないんですね。あれは外国から来た制作チームが中継しました。なぜそうなったかという、彼らの制作技術がすぐれているから任せたといい人もいますが、正解はそうではありません。日本のテレビ局はコストが高いんです。その前に長野オリンピックで、ジャパン・コンソーシアムがホスト・ブロードキャスターをやりましたが、各局から上がってくる制作費が非常に高く、こんなことをやっていたらお金が高くてしょうがないということになりました。聞いたところ、2002 年のワールドカップは外国からクルーが来てやりたけど、日本のテレビ局に払うお金の半分と言っていましたね。そのくらいのお金でできたそうです。少しオーバーかも知れませんが、そういった理由です。

トヨタカップは僕らにとってもう一つ大きな出来事がありました。実はトヨタカップがはじまったときには、全国高校サッカーでは既に試合中にはコマーシャルを入れないようになっていました。全国高校サッカーも、営業サイドはコマーシャルを入れてくれということがあって、それは牛木さんの話にもありました、電通の鍋島さんという人が、高校サッカーのスポンサーはお金を度外視して、本当に日本の若者のためとか、サッカーのためとか、みんなある意味ではチャリティの気持ち、社会貢献の気持ちでお金を出してくれるんだから、と言ってスポンサーに話をしにいつてくれて、確か 2 年くらいでコマーシャルを入れなくてもよくなりました。でも、トヨタカップはさすがにコストが高いので、これは鍋島さんの頼みだったので僕もやむを得ず、前半と後半に一つずつ入れていたのです。

ところが第 7 回大会で、1 対 0 の試合でしたが、ついに唯一の得点シーンがコマーシャル中になってしまい、生放送できなかつたということがありました。もちろんビデオで撮っていましたが、コマーシャルあけに、実はこのような得点が入っていましたと放送はしましたが、それは生中継で見た視聴者の気持ちとは全然違うわけです。そのことがあったおかげで、それ以降サッカーの放送にはコマーシャルを入れなくてもよくなりました。これは第 7 回トヨタカップのおかげです。これも僕らにとって忘れられないトヨタカップでの出来事です。

それから、トヨタカップがはじまるときにこういうこともありました。日本テレビから発注して、電通サイドはどのように動いていたかわかりませんが、結果的には日本テレビから電通に、スポンサーの部分だけ広告代理店としてやらせるということでスタートしたのです。そのときぼくの会社の幹部たちから、日本テレビを主催に入れろと強行に迫られて、僕が大変窮地に立ちました。FIFA は、それは困るということでした。それはもともとで、日本テレビが主催になっていたらたぶん、読売新聞は大きく扱ってくれていたかも知れないが、他の新聞社には無視されただろうし、メディアに大きく扱ってもらえなかつたと思います。トヨタカップはずっと日本テレビが放送させてもらっているが、できたときの経緯があつてのことなんだけれども、トヨタカップも終わりの頃になると、日本サッカー協会は日本テレビだけでなく他の局にもオファーさせて、有利なところでやらせるようにしろだとか、そういう話があつたりして、後輩たちは主催にしておいてくれればよかったのに、と言ったりしたことがありました。電通がかばってくれてやらせてもらっているようではあります。

ではここで少し映像を見ましょうか。ジーコはこの大会と次のワールドカップにまたがるこの時期が最盛期です。だから第 2 回のトヨタカップは、本当にジーコの良いときに来ています。この時の CONMEBOL でフラメンゴが南米の代表になったときに、日本のカメラマンが撮影した、ジーコがカップを持ち上げている写真があるんですよ。それをぼくは伸ばして、ジーコが来たときにサインをし

てもらったのですが、後年ジーコはどうしてもその写真がほしいと言ってきました。ぼくはワールドカップの結果が良ければプレゼントすると言ったのですが、それがうやむやになったので、まだぼくの家にあります。

〔流している映像〕

- ・第2回トヨタカップ ジーコのスルーパスから得点になったときのビデオ

〔映像が流れているときのコメント〕

ジーコのパスの映像です。ここを見ていて下さい。

あそこは、メインの画でそのまま見せるというのも一つの手なのですが、ジーコが主役だということもあって、ジーコがボールを持ったときにはアップで抜こうと考えていたのです。今ご覧になったと思うのですが、ジーコが蹴った後にその画が残っていましたよね。これがちょっとミソです。つまり、蹴った瞬間メインの画に切り変えると、カメラを振っている最中です。ああいうときにちょっと止めて遅らせて、メインの画が安定するまで残してやるというのは、大変微妙なところなんですけど、2006年のワールドカップの時にヨーロッパの人たちもしっかりやっているんですよ。みんなにとってはくだらないことかな…。でもテレビを作っている側の人間にとってみれば、こういうくだらないことに結構気を配っているんだなっていうことくらいはわかっていただけですよ。

もう一度同じ映像を流します。

〔流している映像〕

- ・第2回トヨタカップのさまざまな映像

〔映像が流れているときのコメント〕

- ・最近オフサイドが分かるような映像を作っているのですが、これはユベントスが来たときに日本テレビが初めてオフサイドカメラというものを置いたんです。
- ・はじめの方は結構南米の方が勝ちました。でも、ヨーロッパの方がお金は多く持って帰りましたね。ヨーロッパのチームは、やはり呼ぶのが大変でした。リーグ戦を飛ばしてくるわけだし。特に最初のノッティンガム・フォレストはそうでしたが、その分の保証まで払わなければならなかったですね。
- ・この映像は、今の映像より寄り気味だと思います。一つはヘリコプターの映像を使って引いてパースワークを見せられるようになったというのがありますし、もう一つは、日本の視聴者が、今の人たちと違って、どの選手がどういう技をするかというレベルで見えていたということがあったと思います。

5. その他のトヨタカップの話

1981年2月に第1回大会が行われ、このリバプール対フラメンゴの試合は同じ年の12月に行っていますが、それ以降トヨタカップは12月の第2日曜日に行われるようになりました。

第1回大会は、本当にチケットが売れなくて苦労しました。結果的にはスタンドを埋めることができ、天候にも恵まれ、素晴らしい大会になりました。日本テレビでも数千枚売らなければならず、ぼくらが高校サッカーのチケットとセットで買ってもらっていただきました。日本サッカー協会の方々、そして高体連の方々にも相当割り当てがあつて。そんな第1回大会でした。

ところが第2回、ジーコが来てくれて以降、第3回大会からはチケットの心配はしなくてもよくなり、むしろチケットが手に入らないことの方が問題としてはありましたね。

そんなことで、とりとめの話だったかも知れませんが、何か質問がございましたらお受けいたします。

■ 質疑応答（コーディネーター：牛木）

牛木：何か質問がある方はいらっしゃいますか。

庄司：私自身ずっとドイツにいたもので、その時期のテレビを見たことがないのですが、日本のテレビ中継の先駆者的なところと考えてよろしいのですか。

坂田：衛星放送をしたという意味では、ですね。

庄司：サッカーの中継の仕方という意味でも編集の仕方という意味でも、日本のサッカーとしては画期的だったのですか。

坂田：そうですね。やはり 1970 年から全国高校サッカーのテレビ事業をはじめていきますから、サッカーの中継に関して私たちは非常に経験が多かったし、いい放送をするために、外国のテープを取り寄せたり、ワールドカップの試合をビデオで撮ったりして研修していました。そんなことをしてきましたから、もうテレビに身を置いていないから言えますけど、内心は結構自信を持っていました。

あるとき、ロンドンで FA カップファイナルを見る機会がありました。FA カップは BBC が放送していましたが、15 時キックオフなのに、11 時から「FA カップファイナル」という番組がはじまるんです。30 分位のいろいろなコーナーがあって、コーナーの一つでこんなことをやっていたんです。司会者が居て、円卓があって、ずっと電話を置いてあるんです。そして電話を受ける人たちがいました。視聴者が見たいこれまでのサッカーシーンを募集していたんです。ジョージ・ベストの映像だとか、昔のモノクロの映像だったりしたのですが、その中でなんとトヨタカップのジーコが出てくるんです。これはさすがに嬉しかったですね。

牛木：つまり坂田さんのスイッチングした画面が視聴者の心に残っていてリクエストされたわけだ。これは素晴らしい。

坂田：今はだんだんカメラの台数が増えてきています。ちょっと説明しておきますと、9 台のカメラがあると、中継車に 9 つのカメラが撮った映像が並んでいるんですね。そして、ディレクターの手元に 9 つのボタンがあるんです。そのうちのひとつひとつを選んでいくんです。第 2 回トヨタカップ中継の時は、この他にスロービデオが 4 台ありました。スロービデオのうちの 1 台はずっとメイン画面を。2 台目はディレクターが撮った映像、つまり中継されている映像。あとの 2 台は 9 台のうちからいいなと思われるところからディレクターが選ぶんです。このときは 1 台をジーコを追っているものに使いました。そして、スロービデオの映像が、9 つのカメラの映像の隣に 4 つあるんです。ですから、ディレクターであるぼくは、いろいろ指示をしながら一つずつボタンを押していくわけです。まるでピアノを弾くようにボタンを押していくのです。結構スリリングです。そんなふうにしてサッカーの中継というのは作られているんです。

牛木：仕事振りを見ていると、中継中に坂田さんはけんか腰で怒鳴っているんですよ。終わったらほんとにけんかになるんじゃないかと思うくらいなんですけど、終わったら「ご苦労さん、ご苦労さん」と和やかになっているんですよ。新聞記者は、締め切りが終わって、輪転機が回ってからも、酒飲んでぐだぐだいってるんですけど…。

庄司：これからが核心の質問なんですけど、先ほどポルトガル語の中継がありましたよね。あっちの場合、実況が 1 人じゃないですか。ラジオと同じように語っているということがありますよね。でも、日本の場合は解説が絶対にいる。ヨーロッパの場合、どういう映像やデータを使いたいかという実況とディレクターの絶妙のコンビネーションがあるんですよ。日本の場合、どうしても解説者との会話のタイミングが、どうも画像とマッチングしていないように感じるのですが。それを作っちゃったのは、日本テレビだったりするのかなと思ったんですけど。

坂田：やはり野球中継のスタイルというのが染み込んでいますね。おっしゃるとおりで、何とかできないかといういろいろしましたけど。実況でコメントできる人を育ててきていないというのが大きいですね。だから、ああいったコメントのできるというコメンテーターがない。

庄司：せっかくの画像の芸術を、実況と解説で台無しにしてしまっているようなことがあるんじゃないかな。

坂田：何回か岡野さんが1人でコメントされたというのはありました。岡野さんは一つの試みということでお引き受けになってくれたと思うんですけど、放送されたものに特に反響がなかったから次に続かなかったですね。テレビ東京はたぶん2回くらいやっているんじゃないかな。

牛木：一つは、解説者はいらないと。解説をやるんだったら、ヨーロッパにみたいに、試合のはじまる前、ハーフタイム、試合が終わった後、その方が分かりやすい。どうして掛け合い漫才をやらなければならないんだとよく言ったんだけど、これもなかなかテレビ局の人ということ聞きません。もう一つは、アナウンサーが、画面を見ていればわかることを言っている。「ヘディングシュートしました」なんてね。シュートしたことは画面を見ていればわかります。メキシコなどで中継を見ていると、アナウンサーはほとんど選手の名前しか言わない。画面は小さいし背番号が見えないから、選手が誰だか分からない。だから、アナウンサーが次々に名前を言ってくれるのはありがたいけど、日本では言いません。

たまに中継するのであれば、アナウンサーが選手の名前を覚えるのは大変だと思うんだけど、実はアナウンサーは非常に努力して、選手の名前を覚えています。そんな努力しているのを、なぜ実際の中継で生かさないのかと思うんです。何回か、名前だけを言う実況を試みてくれたところがあるんです。NHKでもやってくれたのですが、聞いたら評判が悪いと。それは視聴者の評判ではなく、社内での評判が悪いということでした。どうでしたか。

坂田：視聴者がそのやり方を良しとしてくれませんでしたね。でも、これからは変わってくる可能性はありますよね。サッカーファンの理解度が高くなってきていますから、視聴者に合った放送の仕方とか、番組を作っている人間ですと考えるとと思います。

僕らもこのときは、あまり視聴者がサッカーを知らないということで、例えば高校サッカーで10年間ぐらい、1試合に1回必ずオフサイドのルール解説をやらせていました。

テレビのメインの画面でもそうです。かつては今よりタイトでした。だんだんルーズになって、フォーメーションがわかりやすくなってきています。

庄司：映像を撮るときに用いたヘリコプターは、地上何メートルくらいですか。

坂田：何メートルか分かりませんが、かなり高いとは思いますが。フォバリングしながら撮ったんですけど、そのフォバリングもいろいろと難しいんですよね。

庄司：特別の許可が必要でしたか。

坂田：当然フライト許可は航空局に出してもらいました。サッカー中継でヘリコプターを使った最初は、関西から東京に持ってきた高校サッカーの決勝、浦和南と静岡学園でしたけど、カメラマンを乗せて空撮をしましたね。こんなすごい大会になっているんだぞ、というところを見せたかった。トヨタカップの第1回もヘリコプターにカメラマンを乗せて中継しましたが、第2回大会から、先ほど話したように、防震のリモコンカメラで中継しています。

両角：直接は関係ないんですけど、さきほどからいい画を撮りたいとおっしゃっていて、これはある方から聞いたんですけど、元旦の箱根駅伝の鉄塔（中継塔）を建てたのは坂田さんだというのは事実ですか。

坂田：それは事実ではありません。でも、人の登らないところに中継所を作ったりしたことはありますけど、塔は建てませんでした。固定した場所でやろうとした場合、機材を相当量運ばなければならないので、今はヘリコプターで運んでいますけど、最初の年は下から山岳部の学生アルバイトを何人も雇って機材を上げたりしました。

牛木：箱根駅伝の実況中継を可能にしたのは、坂田さんの功績なんです。

高田：制作されている側から、過去の映像の中で坂田さんの好きなカットというのは何ですか。

坂田：高校サッカーでは、浦和南と静岡学園の試合ですね、すごい点の取り合いの決勝戦。あれが首都圏に持ってきて最初の決勝戦だったのは幸いしたと思います。あと、トヨタカップの第2回です。これは特にFIFAから誉められたということもあって、良かったんだなと思っているんです。僕らテレビで仕事をしている人間は、自分たちがどれだけ苦勞して作ったかを言うものじゃない。当たり前なんだけど、自分が現場の時は絶対に言わないですね。今はこういう立場ですから、思い出話としての自慢話めいて話していますけど。そういうことも分かった上で言うと、今言った2つはサッカーの中では忘れられない、自分がディレクターとしてやった仕事でした。

いっぱい失敗もしています、僕がディレクターで。プロ野球の日本シリーズ、後樂園での阪急と巨人の試合で、阪急の山田が自分の生涯で最もいいピッチングをしたと言っている試合でのことです。1対0で阪急がリードしていて、最終回、ランナー1・2塁で王が逆転サヨナラホームランを打つんですよ。そのとき山田はうずくまるんですね。西本監督がダグアウトからマウンドまで歩いて行って、抱き起こされるまで山田はずっと泣いているんです。その画をワンカットも取れていないんですよ。そのとき2アウトでしたから、ぼくは山田が完封して終わる画をカメラマンに指示をして待っていたんです。でも、カメラマンも予想もしないようなことが起こったので、みんな喜んでいる巨人の選手の方に行ってしまうと、僕はカメラマンに「ピッチャーを撮れ！」というように怒鳴っているんですけど、スタンドの大歓声で聞こえないんです。中継で怖いのは、カメラで撮ってボタンを押さなければみなさんが見られないということなんです。ぼくの中継はうずくまった山田をみなさんに見せていないんです。これは、僕のディレクター人生の中でも痛恨の仕事でした。

牛木：トヨタカップでプラティニがシュートを決めただけオフサイドを取られて寝っ転がりでしたが、あの画を撮れたのは坂田さんのおかげですか。

坂田：ぼくの後輩の福田君というのがディレクターで撮りました。ぼくはジャパンカップの時から、電通が買い切ってくれるといったものですから、これ幸いと、アナウンサーとディレクターを、出場する選手の地元事前に取材に行かせました。それはみんなサッカーの先進国ですから、いろんなことを感じてくるんですよ。スタンド一つ取ってみても、ファンをみてもすごいと思うんですよ。中でも、福田君はユベントスの取材に行き、ユベントスの試合を見たときに、向こうの中継でプラティニカメラがあることを聞き、帰ってきてプラティニカメラを置きました。そのときからカメラが9台から10台になりました。だから、ああいう画を撮れたんです。

牛木：ジダンの頭突きを撮れたのも、ジダンカメラがあったからなのかな。

坂田：そうですね。たしか27台だったかな。FIFAの技術委員会の要請で、どのカメラも再生できるようになった。だから、すぐに頭突きの映像を再生することができたんですね。

牛木：日本テレビは毎回事前取材に行かせているわけですが、実は読売も毎年1人取材に行かせています。ぼくが仕切っていた頃は、1人で南米とヨーロッパに行かせていたのですが、最初に行ったのはここにいる木佐貫君です。彼はジーコの取材にも事前に行っているんです。そのときの話を一つだけしてください。

木佐貫：第2回と第3回に2年連続で行ったのですが、南米はリベルタドーレス杯で出場国の試合を見させてもらいました。最初は、ジーコの時ですからリオに行って、それからサンチャゴに行きました。その後巡り巡ってブエノスアイレスに行ってきました。その中で印象に残っているのは、ブエノスアイレスで優勝を決めて、ほぼ貸し切り状態の中型機だったんですけど、ワインが回ってきて、ジーコをはじめ、サンバを飛行機の中で踊り始めたんです。壁をたたくは、足踏みをするは。もしかしたらこの飛行機は落ちるんじゃないかという怖い思い出をしたこと

があります。それからもう一つ、最初の取材のリオであったのですが、その時代の日本人のサッカーの認識からいうと、フラメンゴのチームに行き、ゴール板が幾つも区切ってあって、GKの人形が置いてある。みんな練習が終わった後、フリーキックの練習をしている。これは、へーって思いましたね。当時は映像で見られる世界のサッカーの情報はダイヤモンドサッカーくらいしかなかったですから、見るもの見るもの新しかったです。79年に日本でワールドユースが開かれて、そこでマラドーナがブレイクしたんですよね。そういうのを見て、だんだん世界に関心の目が向けられていったような気がします。

牛木：チリかどこかの山の中のスタジアムに観に行き、夜、ファンが新聞紙を丸めて火を付けてバックスタンドが燃え広がるのがとてもキレイだという生き生きとした記事を送ってきたんです。でも、ぼくはその記事を破って捨てました。そんな記事を新聞に載せて、これを日本で真似したら大変だって思ってね。

そろそろ時間になりましたが、中塚さん何か。

中塚：サロンには、大ジャーナリストの方々が会員にいらっしゃいまして、それらの方がお元気なうちに（笑）、日本サッカー史の、表に出てこない部分をいっぱい聞き出しておこうと考えた企画です。今日はその一連のシリーズの第1弾ということで、坂田さんにお越し頂きました。どうもありがとうございました。